

滋賀県における朝鮮人強制動員の記録(1)

— 韓国における生存者の聞き取り調査より —

河 かおる

人間文化学部国際コミュニケーション学科

1. はじめに

2012年8月30・31日、筆者は3名の韓国人男性にインタビューを行った。この3名はいずれも80歳を超える高齢で、戦時中に滋賀県内で何らかの形で強制動員されていたという経歴を持つ方々である。本調査は、韓国政府の「対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会」（調査2課）および山村暁子氏（あすばる甲賀）との共同調査として実施した¹。本稿は、その調査結果報告である。

2. 調査の背景と経緯

最初に、どのようにして本調査の対象者にアプローチが可能になったのかの説明を兼ねて、本調査の共同調査者である「対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会」²について説明することとした。

同委員会は、次の二つの委員会を2010年10月に統合して発足した委員会である³。一つは、2004年3月に制定された「日帝強占下強制動員被害真相糾明に関する特別法」に基づいて同年11月に発足した「日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会」（通称「強制動員委員会」）。もう一つは、2007年12月に制定された「太平洋戦争前後国外強制動員犠牲者等の支援に関する法律」に基づいて、2008年6月に設置された「太平洋戦争前後国外強制動員犠牲者支援委員会」（通称「支援委員会」）。

強制動員委員会は、全国および海外各地からの被害申請を受け付け、強制動員被害の認定および真相究明を行ってきた。この真相究明活動の一環の資料調査のため、2006年に強制動員委員会が本学図書館情報センター所蔵の朴慶植文庫資料を調査したことがあり、筆者も協力した。また、支援委員会のほうは2008年より支援申請の受付を開始し、支援を行ってきた。当初、日本政府が厚生年金や供託金に関する名簿提供に消極的であったため、被害申請者の約6割が、被害認定が受けられずにいたが（福留2010）、民主党政権になり、徴用者の未払い賃金に関する記録が提供され、認定が進むとみられている。こうして被害申請を受け付け、調査を行ってきた結

果、いつ、どこに、誰が動員されたかというデータが委員会に蓄積された。今回、聞き取り調査に先立って同委員会より提供を受けた滋賀県関連のデータは表1のとおりである。筆者は以前、河・稲継（2011）において、諸資料や証言等から確認できる範囲で、戦時中に滋賀県で朝鮮人労働者の移入先を一覧表として示したことがあるが、表1の「作業場」は、それと一致するところが多い。一部一致していないところについては今後さらに調査が必要である。

表1の生存者38名のうち、健康状態等の関係でインタビュー可能な方として17名のリストの提示を受けた（表2）。動員当時20歳だった方が現在90歳前後であることを考えると、それより上の世代は現在生存されている方は少なく、結果として徴兵対象年齢の生存者が多いためか、「軍人」の類型が目につく。

このうち、今回の調査でインタビューが実現したのは、4番、5番、6番の3名である。本号では、この3名のうち、5番のHK氏の聞き取り調査結果を報告する。

3. 朝鮮人徴兵制度と「農耕隊」について

HK氏の聞き取り調査内容に入る前に、朝鮮人徴兵制度といわゆる「農耕隊」⁴について、先行研究⁵に基づき整理する。

調査にはいる前、HK氏についてわかっていたのは、生年が1924年であること、「4199部隊」という名の部隊に軍人として動員されたこと、本人が「ヒガ（滋賀？）」「イマツ（今津？）」という地名を憶えているという情報だけで、委員会からも「滋賀県とは関係ないかもしれないので調査対象からはずしますか？」と言われていた。しかし筆者は、今津という地名および生年が徴兵対象年齢であることに着目し、HK氏が徴兵されて「農耕隊」として滋賀に送られた可能性が高いと考え、調査対象に含めて欲しい旨伝え、事前調査を行った。

1) 朝鮮人徴兵制度

日本は、1942年5月、朝鮮人に対して徴兵を行

表1 作業場別動員・被害類型現況(滋賀県)

	作業場	生存	死亡		行方不明	合計
			帰還後	動員中		
軍人	滋賀航空隊	1	0	0	0	1
	大津航空隊	1	2	0	0	3
	第98部隊(中部第8航空教育隊)	1	0	0	0	1
	98部隊	2	0	0	0	2
	34269部隊	1	0	0	0	1
	中部第37部隊	0	1	0	0	1
	12553部隊	1	0	0	0	1
	農耕勤務隊	1	0	0	0	1
	歩兵78聯隊補充隊	1	0	0	0	1
	419部隊(13航空地区司令部)	0	1	0	0	1
	八日市(現 東近江市) 所在 部隊	1	0	0	0	1
	不詳	10	14	0	0	24
軍務員	堅田 所在 工場	1	0	0	0	1
	不詳	1	0	0	0	1
労務者	岡崎産業(株)	1	0	0	0	1
	日窒鉱業(株) 土倉鉱業所	3	5	1	1	10
	住友金属(株) 堅田製作所	0	3	0	0	3
	住友金属工業(株) 伸銅所	1	0	0	0	1
	小野田セメント製造(株) 彦根工場	3	16	0	0	19
	滋賀航空隊工事業場	1	1	0	0	2
	深坂トンネル工事業場	1	0	0	0	1
	甲賀郡 所在 炭鑛	1	0	0	0	1
	大津 所在 工場	0	2	0	0	2
	八日市(現 東近江市) 所在 飛行場	0	0	0	1	1
	不詳	5	21	1	0	27
	合計	38	66	2	2	108

「対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会」提供のデータより作成。
 原注：被害類型は、被害申告書を基に作成したものの、現在の状況とは相違する場合がある。
 備考：作業場の名称は、提供されたデータのまゝ。

表2

番号	受付番号*1	被害者*2	創氏名*3	本籍地	所属及び担当業務	動員類型	居住地域
1	束草市	KD	○	江原道	第34269部隊	軍人	江原道束草
2	束草市	SS	○	ソウル	中部第98部隊	軍人	江原道束草
3	城南市	KK	○	全羅北道	小野田セメント(株)	労務者	京畿道城南
4	安養市	HY	○	慶尚北道	岡崎産業(株)	労務者	京畿道安養
5	安養市	HK	○	忠清南道	日本4199部隊	軍人	京畿道安養
6	平澤市	KJ	○	京畿道	中部第98部隊	軍人	京畿道平澤
7	咸安郡	CI	○	慶尚南道	12553部隊	軍人	慶尚南道咸安
8	完州郡	PJ	○	全羅北道	海軍滋賀航空隊工事	労務者	全羅北道完州
9	委員会	CP	○	忠清南道	農耕勤務隊	軍人	忠清南道泰安
10	瑞山市	PP		忠清南道	不詳	軍人	忠清南道瑞山
11	瑞山市	AJ		忠清南道	不詳	軍人	忠清南道瑞山
12	瑞山市	CD		忠清南道	不詳	軍人	忠清南道瑞山
13	瑞山市	KK	○	忠清南道	大津航空隊	軍人	忠清南道瑞山
14	瑞山市	PD	○	忠清南道	不詳の部隊	軍人	忠清南道瑞山
15	瑞山市	YK		忠清南道	不詳	軍人	忠清南道瑞山
16	瑞山市	CS		忠清南道	不詳の部隊	軍人	忠清南道瑞山
17	堤川市	KJ		忠清北道	日窒鉱業(株) 土倉鉱山	労務者	忠清北道堤川

*1 番号は省略した。

*2 イニシャルのみ記した。

*3 創氏名の記載がある場合のみ○印を付けた。

うことを閣議決定し、1943年5月の兵役法改正に基づいて、1944年4月1日～8月20日、第1回徴兵検査が朝鮮全土で行われた。第1回徴兵検査の対象は、1923年12月～1924年11月生まれの者で、22万2295人が受検し、甲種合格者7万4500名のうち日本語の理解できる5万1737人が現役徴集された(塚崎2004)。後述するように、HK氏はちょうどこの対象年齢であり、乙種合格者であったという。

甲種合格で現役徴集されなかった者と、第一乙種の合計約9万名は、第一補充兵とされ、臨時編成される部隊等への召集を待つことになった(塚崎2004)。塚崎(2004)は、現役徴集兵の入営が一段落した1945年初頭から第一補充兵の召集が開始されたが、その理由は2月からの第二回目の徴兵検査開始にあるのではないかとという。日本語を理解しない者は現役徴集されないとすると、徴兵検査において日本語が理解できないふりをして、徴兵忌避を策動するのではないかと恐れ、日本語を理解しない者も徴兵されることを示し徴兵忌避を抑止しようと考えられたのではないかとという。そこで、日本語を理解しなくてもできる、「本土決戦」準備用の労働を、従来の国家総動員法による「官斡旋」や「徴用」の朝鮮人労働者ではなく、より強制性の強い朝鮮人「兵士」(第一補充兵)に担わせようとした。ここで「兵士」に「 」が付くのは、「兵士」とは名ばかりで、武器を持たせない「労働者」だったからだ。塚崎氏は、一般的に朝鮮人労働者の強制連行は「募集」→「官斡旋」→「徴用」の三段階と説明されてきたが、第四段階として「徴兵」を位置づけることが可能だと指摘する。

2)「自活隊」「農耕勤務隊」

1945年初頭、「本土決戦150万人計画」が立てられ、増員が計られた。特に軍用食糧確保のための人員供給源として、先述の第一補充兵が充てられた。2月28日、陸軍機密117号「在内地、朝鮮師団、独立混成旅団及師管区部隊等臨時動員、編成改正、称号変更並第三百二十八次復員要領細則規定の件達」を出し、朝鮮人「兵士」9900人の「各軍管区自活要員」(通称「自活隊」)としての動員が決定され、以下のように軍管区毎に割り当てられた(塚崎2004)。

北部軍管区 2475名
 東北軍管区 900名
 東部軍管区 2250名

中部軍管区 1800名

西部軍管区 1350名

滋賀県は中部軍管区に属するが、塚崎(2004)によれば、第五耕作隊と第六耕作隊の勤務地(開墾地)が滋賀県饗庭野であったことがわかる。HK氏はこの中に含まれていたと思われる。

一方、軍用の食糧生産を主とする「自活隊」とは別に、航空燃料採取のための甘藷栽培を中心とした「農耕勤務隊」も設けられ、主に関東、中部地方に配置された。すなわち、1945年1月30日、「諸類増産対策要項」が閣議決定され、同日、陸軍は軍令陸甲第16号「農耕勤務隊臨時動員要領」を出した。人員は、編成初期には日本人兵士を充てたが、朝鮮人の第一補充兵を召集し、日本語がわからなくても従事させられる軍用の諸類増産に回すことにしたのである(塚崎2004)。

このようにして、1945年4月下旬以後、農耕勤務隊が1万4500人以上、自活隊が1万人以上、野戦勤務隊が1万8000人以上、地下施設隊が2000人以上、その他特設作業隊や臨時勤務隊など合計5万名近くの朝鮮人が、敗戦間際の3ヶ月半、日本に連行された(塚崎2007)。

塚崎氏が防衛研究所附属図書館で発見した、1945年4月7日付けの朝鮮軍管区参謀長が船舶司令部参謀長に宛てた電報文で、以下の朝鮮人「兵士」合計3万9655名を日本に送り出す船の手配をしたことが確認できるという(塚崎2004)。

西部軍勤務中隊要員 計1万5705名

内地各軍管区自活要員 計1万730名

農耕勤務隊要員 計1万3000名

混成第107旅団自活要員 220名

HK氏は、「内地各軍管区自活要員」1万730名の一人であったと思われる。ところでHK氏が属していたという「4199部隊」という部隊名が、第五・第六耕作隊に対して与えられていたかどうかについて、手元の資料では確認ができなかったため、防衛省防衛研究所に電話で照会したところ、中部軍管区耕作第1中隊～第8中隊を指す「通称号」が「中部4199」であったことが確認できた。さらに後日、防衛研究所附属図書館蔵「本土配備部隊行動概況表」がアジア歴史資料センターのWebサイトで公開されていることが分かったので、直接資料を確認した(図1)。

図1 「本土配備部隊行動概況表」に記載された「4199部隊」
翻刻

同 耕作第6中隊	昭 20 4. 22 於 京 都	中部軍管区耕作第5中隊	(中略)	固 有 年 月 日 名	結 成	中部軍管区直轄部隊		
						昭和20年2月11日編成(中部軍管区司令部)中部管内(大		
						阪、京都、兵庫、和歌山、奈良、滋賀、福井の二府五縣各師		
						管区部隊及軍管区直轄部隊、陸軍病院等を統率し動		
〃	〃	中部 4199	通	編成から終	終戦時の位置	終戦後朝鮮人は昭和20年8月下旬博多に集結し爾後逐次乗船 朝鮮へ送還した		
〃	〃	饗庭野演習場 の開墾耕作	通	戦迄の行動	と爾後の行動			
〃	〃	滋賀県高島郡饗庭野 演習場	通	戦迄の行動	と爾後の行動			
〃	〃	昭和20 9 月上旬復員	通	戦迄の行動	と爾後の行動			

中部軍管区耕作第5中隊 昭20.4.22 於京都	耕作第6中隊	中部軍管区直轄部隊	編成年月日名	通	戦迄の行動	終戦時の位置	整理
昭和20年2月11日編成(中部軍管区司令部)中部管内(大 阪京都兵庫和歌山奈良滋賀福井の二府五縣各師 管区部隊及軍管区直轄部隊陸軍病院等を統率し動 員編成補充教育輸送衛生並警備等の諸業務に任じた 終戦後朝鮮人は昭和20年8月下旬博多に集結し爾後逐次乗船 朝鮮へ送還した							

防衛研究所附属図書館所蔵
 (請求記号:中央-軍事行政編制-421)
 簿冊「本土配備部隊行動概況表」
 件名「中部軍管区直轄部隊」
 国立公文書館アジア歴史資料センター Web サイトにて公開
 (レファレンスコード C12121380900)

以上、HK氏は、朝鮮での第1回徴兵検査を受け乙種合格者として第一補充兵となった後に召集され、「内地各軍管区自活要員」の一人として、滋賀県饗庭野演習場で開墾耕作を行うことを任務とする中部軍管区耕作第5中隊もしくは同第6中隊に配属され、1945年4月に日本に送られた可能性が極めて高いということが事前調査で確認できた。

なお、雨宮(2012)によれば、雨宮氏が2008年8月に強制動員委員会に照会したところ、「農耕隊員であった」と認定された元隊員は約1300名で、その時点での生存者は約500名とのことである。後述するが、HK氏自身は「自分は農耕隊ではない」と主張しているので、HK氏のようなケースはカウントされていないと思われる。

4. HK氏への聞き取り調査結果概要

以上のような事前調査を行った上で、HK氏への聞き取り調査を行った。調査は、2012年8月30日午後14時半から約2時間にわたって、HK氏が居住する安養市内マンションの会議室で行われた。調査者は、筆者のほか、委員会調査2課の李姪垠氏、

尹智炫氏、そして山村暁子氏(あすばる甲賀)である。質問は主に筆者が韓国語で直接行い、山村氏には李姪垠氏が概要を通訳して進化した。質問項目は事前調査に基づき大まかに書き出しておいたが、HK氏には見せず、自由に話していただいた。以下、話が重複・前後している部分等を時系列で再構成し、HK氏の述懐内容の概要を□で囲って示した上で、補足説明などを加えていく。

1) 徴兵され日本へ

1923年1月、忠清南道瑞山に生まれ、現在、数えて91歳。出生届を遅くしたので⁶、戸籍上は1924年2月生まれになっている。住んでいたところの近くには学校がなく、小さい子どもが歩いて通うには大変だからということで、1年遅れて入学した。洪城というところに母方の親戚の家があって、そこから学校に通った。6年制の尋常小学校だ⁷。

卒業後、今で言う地方公務員のような仕事を高北面の面事務所ですしていたところへ、徴兵検査を受けることになった。1944年春、3月か4月に徴兵検査を1期生として受け、乙種合格した。甲種合格の人は早くに召集されたが、乙種は少し遅く召集され

た。

1945年4月5日、平壤で入営した。平壤へは同郷の者と一緒に汽車で向かった。同じ瑞山郡出身の者が100名ほどいた。同じ面からも4～5人いて、日本に行って帰ってくるまでずっと一緒だった(小隊は違った)。平壤での部隊名はおぼえていない。

田中少尉が率いる「田中小隊」に属し、敗戦までずっと同隊に属した。平壤で10日間ほど訓練を受けた。平壤に召集されるときはその次にどこに連れて行かれるか分からず、訓練を終えて汽車で釜山に向かう道中、日本に行くとかんがえて逃げだそうと列車から飛び降りた人がいた。同郷の人ではなかったので詳しくはわからない。

釜山から貨物船に乗って夜通し12時間ぐらいかけて博多に着いた。船でも、脱走しようと海に飛び込んだ人が二人いた。関釜連絡線は本来下関に行くのだが、その時、下関は近づけなかった。米軍が魚雷を埋めて、私が乗っていた船でも「危険」と放送していた。私たちが行く少し前に連絡船が沈んでたくさん犠牲が出た。

先に確認した、第1回徴兵検査および第一補充兵が農耕隊として召集され日本に送られる経過と時期がほぼ完全に一致する。前掲の図1の資料で、耕作第5中隊および第6中隊の「結成年月日」が1945年4月22日(於 京都)となっているので、4月5日に平壤で入営して10日間ほど訓練を受け、釜山、博多を経て京都へ着くとすると4月22日頃になると思うのでそれも一致する。そして京都でしばらく滞在してから今津に入ったというから5月頃で間違いなさそうだ。

下関の魚雷についてだが、塚崎昌之(2007)によれば、1945年3月末から4月半ばにかけて、米軍は関門海峡付近に夥しい数の機雷を投下した。そのため4月1日に関釜連絡船興安丸が下関沖で触雷し、以後、関釜連絡船の旅客便は博多港発着に変更されたという。HK氏の話はこの史実と一致する。

2) 滋賀県今津で

博多から汽車に乗って京都で少し滞在して、今津へ着いた。5月頃だったと思う。まだ山の上には雪があっぴくりした。日本に着いてからでも脱走した人がいたが数時間のうちに捕まった。

一つの中隊は240名ほどで、70～80名からなる小隊3つで構成されていた。そのうち自分が属して

いた「田中小隊」も70～80名ほどで構成されていた。一つの小隊は6つほどの「分隊」(班)に分けられ、一つの班は約17人で構成されていた。中隊長、小隊長、班長は皆日本人で、刀を持っていた。あとは全員朝鮮人だった。私と同じ忠清南道瑞山郡出身者の他には、「以北」〔38度線以北の意味〕の人も多かった。

図2と図3はいずれもHK氏が今津にいた時に撮影された写真である。図2は「田中小隊」の写真で、数えてみると86名写っている。刀を持っている前列の5名が日本人で、あとは皆朝鮮人だとい

図2 HK氏が軍人当時撮影した団体写真



出典：対日抗争期強制動員被害調査及國外強制動員犠牲者等支援委員会編『조각난 그날의 기억』同委員会、2012年
原注：HKが滋賀県所在4199部隊所属軍人として動員された時に撮影した団体写真で、下段には「4199田中小隊」と記載されている。HKは最後列の右から6番目に位置している。(HK 寄贈)

図3 4199部隊田中小隊団体写真



出典：対日抗争期強制動員被害調査及國外強制動員犠牲者等支援委員会編『조각난 그날의 기억』同委員会、2012年
原注：HKが軍人として動員されたときに撮影した団体写真で、写真の裏面には、「1945年5月20日 中島隊千賀班一同記念写真」と記載されている。HKは前列より2番目、右側。(HK 寄贈)

う。図3は分隊(班)の写真で、5月20日に撮影したということは到着してまもなくの頃であろう。17名写っている。「以北」の人が多かったという証言は、筆者が以前、高島市在住の在日コリアンから聞いた話とも一致する。

訓練ではもちろん日本語が使われたが、訓練以外では韓国語を使っても別に怒られなかった。自分は学校を出ているから日本語もできたが、大多数は農村出身者で日本語ができないから、韓国語を禁止したくてもできなかったらう。

私は字も書けたので、よくたばこと引き替えに故郷の家族への手紙の代筆や、届いた手紙の内容を読むのを頼まれた。手紙をハングルで書いても別に咎められなかった。だって日本語で書いて送ったって受け取るほうが読めないから。

私は、芋を植える仕事は最初の5月、6月の2ヶ月はやったが、一番暑い7月、8月はやっていない。松脂も採った。日本語ができたので、選ばれて事務所で仕事をするようになった。他の人は暑中ずっと芋を植える作業をしていた。でも結局農作業なのでそれほど大変ではない。「気合」を受ける[しごかれること]のような人権蹂躪もなかった。軍服や毛布、軍靴も立派な上質のものをもらった。ただ食糧が足りなくていつも空腹なのは困った。

雨が降ると訓練や作業は休むことになっていたが、おかしなことに私たちがいた4ヶ月間、夜は雨が降るのに昼間は全然雨が降らなかった。

「使役」といってときどき外出できた。

酒(正宗)とたばこが週二回ぐらい配給された。陸軍士官学校の砲部隊があり、見習士官が来ていて、その中に日本名がハヤシという韓国人がいた。故郷を尋ねたら温陽温泉で、同じ忠清南道だったので親しくなった。延禧専門学校〔現在の延世大学〕の学生で学兵だったようだ。ハヤシは学生だからたばこがもらえないので欲しいと私に頼み、ときどきトイレで落ち合せてあげた。ハヤシはその後、南洋に出征したらしいが生きて韓国に帰ったと後で知った。

私は二等兵で星一つだった。銃はもらっていないがタイケン〔帯剣?〕はもらった。農作業をする時は、軍靴ではなく地下足袋を履いていた。

雨宮剛(2012)によれば、雨宮氏が幼い頃に愛知県三河で目撃した「農耕隊」の鮮烈な記憶は、襟章に星が一つも無い「赤ベタ」つまり階級がないということだったという。HK氏は、第五・第六耕

作隊に属していたが、日本語能力などを買われて中間管理職的な仕事を担っていたと思われる⁸。雨宮(2012)収録の、日本人の元農耕隊員の証言によれば、銃剣を与えられず地下足袋を履かされた農耕隊は「農耕隊が兵隊なら電信柱に花が咲く」といってバカにされたという。HK氏は帯剣していたとのことだが、このような軍国主義文化の中で「農耕隊」への蔑みを内面化し、「自分はイモを作っていない。ノーコートではない。」ということをしきりに強調されていたのだと思われる。

そのような意識は干拓作業をしていた人々と同じように思われたくないという様子からもうかがわれた。今津町史編集委員会(2001)に川上村の「校中日誌」に基づいて、次の記載がある。

〔昭和〕20年4月5日には農兵隊(107名)が、

7月5日からは京都帝国大学学徒隊(経済学部生)が、〔川上国民学校の〕校内に宿泊して近くの貫川内湖の作業にあたっている。(強調引用者)

この「農兵隊」が朝鮮人かどうか『今津町史』からはわからない。また、水谷(2009)によれば、『南船木史』(安曇川町南船木地区編 1999年)に掲載された、内湖干拓に動員された今津中学の生徒の証言に「農耕隊と呼ばれ韓国(朝鮮)から強制招集された人たちと多数参加しました」とあるという。

筆者も湖西の内湖干拓に朝鮮人が従事していたという証言を聞いたことがあるので、HK氏が何かご存知かと思い、質問した。また、部隊外の、地元に住んでいた同胞と交流することができたかとも尋ねてみた。

干拓は徴用された農耕隊がやっていたのではないか? 私たちは軍隊で、山のほうにいたから知らない。日本人の学生が学徒動員されたのも見ていない。国民学校ではなくちゃんと兵舎に泊まっていた。今津には同胞が3世帯住んでいると聞いた。そのうちのどこかの娘さんと知り合って話したことがある。何を生業にしているのかは聞かなかったが農業のようだった。一応交流はできた。

『今津町史』にある「農兵隊」は、いわゆる「少年農兵隊」⁹のことで、日本人の少年なのかもしれない。少なくともHK氏の属した部隊は作業場所が異なっていたようである。水谷(2009)によれば、大郷内湖(現長浜市)で「第五農耕隊勇士」が干拓作業にあたったという当時の新聞記事があり、水谷氏は徴兵されて今津に来ていた「第五、第六耕作

隊」の一部が大郷内湖など別の場所へ出動していた可能性を指摘している。そこで、HK 氏に、饗庭野演習場以外の場所での作業に従事した事例を知っているかと尋ねたところ、次の答えであった。

干拓は一切やっていないし、演習場から離れたところ、部隊から離れたところに作業に行ったというのは、私の知る限り無い。

HK 氏の所属していた中隊が第五耕作隊と第六耕作隊のどちらなのかはわからず、もし HK 氏は第六耕作隊に属していて、第五耕作隊のことは把握していないとすれば、水谷氏の推測もまだ可能性はあると思われるが、はっきりしたことはわからなかった。

今津町では、1945年7月28日、特攻隊として北九州へ向かう途中の日本軍機ゼロカン四機が、米軍機グラマン F 6F 四機に攻撃されて全て墜落するという出来事があった。今津町史編集委員会(2001)によれば、墜落したのは角川(当時は三谷村)と梅原で、角川は集落東側の山の斜面に二機、集落北西の赤岩谷に一機が墜落し、梅原は荒谷支流のワル谷に一機が墜落したという。多くの住民が燃えながら墜落するのを目撃したとのことなので、HK 氏にも記憶しているか尋ねてみた。

米軍機が2機だけ来たのをおぼえている。天気の良い日だった。撃たれたのは水上に浮くタイプの飛行機だった。とにかく煙がすごくて、何日間も煙の匂いがした。

これも正確に記憶されているようだった。煙のことを何度となく強調された。また兵舎についても尋ねた。

開墾地は演習場のある山のほうにあって、兵舎は市内にあった。兵舎から演習場の中の開墾地までは毎日歩いて行った。それと毎日風呂に行かされて行かないと怒られた。風呂に行く時に「トウヨウヘイワノタメナラバナンノイノチガオシカロウ」という軍歌が何かを必ず歌わされた。風呂を焚く燃料は開墾で抜いた木の根とかだった。

2001年に近江今津まで行って当時自分がいたところをめぐってみたが、兵舎があったところの近くには高速道路のような大きな道路が通っていた。当時は人口も少なく辺鄙なところだったが、今は戸建て住宅がたくさん建って別荘地のようになっていて驚いた。1945年当時は今津駅が終着駅だったが、2001年に行ってみたら湖西線がもっと北の方に線路が延びていて驚いた。

持参した地図で確認していただいたところ、現在、陸上自衛隊今津宿舎があるあたりに、当時の陸軍の兵舎があったようだ。そして兵舎の西側に広がる饗庭野演習場の中に開墾地があり、そこを往復する毎日だったようである。今津町史編集委員会(2001)に、陸軍演習場廠舎の一部が払い下げられ公営住宅地(天神団地)になったとあるので、そちらかもしれない。いずれにしろ現在の陸自宿舎に隣接したエリアである。

そして HK 氏は2001年6月、自分が若い頃を過ごした場所を確認するために、今津まで来たという。その時に撮った写真のアルバムも見せて頂いた。

3) 帰郷

1945年8月15日の日本敗戦後、17日か18日頃には出る準備をしと言われた。月給や軍服、毛布などがまとめて支給された。弁当も用意した。博多までは当時は何回も乗り換えて何日もかかるから。

21日に、田中小隊長、中隊長が引率して、今津駅から列車で博多まで行った。秩序は保たれていた。広島を通ったとき、山の片側だけが焼けているのを見た。ゲンシバクダンというのが落とされたことはその時に知った。

列車40車両全て韓国人で、送還するために仕立てられた列車のようだった。博多に付くと、韓国の将校が来ていて、こちらの中隊長が引継のようなことをしてサインをしていた。博多から下関に行ったら数千人の人が船を待って、公園で寝ていた。私は同郷の4人と別行動をとり、密船で8月30日に仙崎〔「センダイ」と言われたがおそらく仙崎のことと思われる〕から8時間かけて釜山に向かった。故郷の家に着いたのは9月3日か4日だったと思う。

行く前に結婚していたが、子どもはいなかった。帰ってみたら子どもが産まれていた。妻が妊娠したのも知らないで日本に行ったことを後で知った。

徴兵されて中国の戦線に送られた人は苦勞した人が多いらしいが、日本に送られた我々はましだった。

前掲の図1に見られる復員に関する記述や時期とも符合する。HK 氏に「部隊が開墾していた農地に食物が実るのは見られなかったわけですね」と尋ねると、もちろんだと答えた。

塚崎(2004)は、朝鮮人農耕隊が植え付けた芋などが秋に収穫され、一部の日本人の飢えを救ったこと、朝鮮人農耕隊が開墾した土地のかなりが、戦

後、大陸からの日本人引揚者などの入植地になったことを指摘している。今津町史編纂委員会(2001)によると、饗庭野演習場の開墾地も、戦後の食糧難の中、1945年11月の閣議決定「緊急開拓事業実施要項」に基づいて、饗庭野陸軍演習場主管事務所によって耕地開拓が進められた。1946年3月に一斉入植が予定されていたが、折しも同月にGHQが饗庭野演習場を野砲射撃訓練に使用するため接収したため、交渉の末残留することになった数世帯を除いては別の地へ移植した。なお、今津町史編纂委員会(2001)には、朝鮮人の「農耕隊」が来て開墾に当たっていたことについては記載が無い。

5. おわりに

HK氏は、「とにかく空腹だったが、上官による“気合い”など、人権蹂躪のようなことは自分は一度も受けなかった」ことを何度も強調した。また、今津で過ごしたことを大変懐かしそうに話し、後年、わざわざ今津まで行って当時を懐かしんだという話も写真まで見せながら語ってくれた。その様子は、自分を「悲惨な強制連行の被害者」として見ることを頑に拒否するようでもあった。

このような態度は、今回の調査に応じて下さった3名の方に、程度の差はあれ共通して見られ、筆者と山村氏が日本人であることに気を遣っているのではないかと気になった。委員会に戻った後、そのことを同行した委員会の方やその上司である鄭惠瓊課長に話すと、やはり「日本から来た方と調査に行く場合は、どうしてもそういう傾向がある。誰が話を聞きに行くかによって被害生存者の方の話し方は違う」ということだった。

雨宮剛(2012)には、われわれの調査同様、委員会の紹介を受けて3名の「農耕隊」経験者へのインタビューを行った結果が収録されている(連行先はいずれも愛知県)。これらの証言への解説文「被害者の証言にいかにかに耳を傾けるか」において、雨宮氏の大学の同僚であり朝鮮女性史研究者の宋連玉氏は次のように述べている。

「体験そのものが証言者のその後の人生によって相対的な価値付けがなされる」ことに注意を払い、「証言の裏に潜む個人と社会の歴史をくみ取る感性と知性が、証言を聴く側に求められる」。「外国旅行など思いもよらぬ時代に見聞を広め、自分の世界を広げることができました」というような証言者の回

想があるが、それだけを切り取って、植民地期に朝鮮人が味わった苛酷さを希釈するようなことがあってはならない、と。

HK氏の証言についても、同様のことが言える。

農耕隊の証言集を自費出版した雨宮氏は、農耕隊が開墾していた豊田市の郷土資料館に「農耕隊」の資料記録が全く存在しないことをあげ、「現在の豊田市内の宅地、農地の多くが農耕兵の汗と血と涙の結晶であることを思うとき、歴史とは、郷土史(家)とは何かを問わずにはおれない」としている。同感である。

本調査においても、多くの自治体史等を参照したが、農耕隊に限らず朝鮮人に関する記述はほとんどないのが常である。歴史資料館、平和記念館等の展示も同様である。筆者自身も自治体史に関わってみて思うことは、自治体史が「地元」資料を活用することにこだわるあまり、南方から連合軍捕虜を、朝鮮半島から農耕隊を連れてきて遂行するしかなかった「本土決戦」期の郷土史が、逆に見えなくなっているのではないか。海の向こうにまだ証言者が生きている大切な史実を、無かったことにしてはいけなさと痛感する。

【参考文献】

- 雨宮剛編著,2012,『もう一つの強制連行 — 謎の農耕勤務隊 — 足元からの検証』(自費出版)
- 今津町史編集委員会,2001,『今津町史 第3巻 近代・現代』今津町
- 河かおる・稲継靖之,2011,「滋賀県の近現代史の中の朝鮮人」滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科編『大学的滋賀ガイド — こだわりの歩き方』昭和堂
- 金廣烈,2010,「1945년 전반기의 日本陸軍 農耕勤務隊와 피동원 한인」『韓日民族問題學會』19
- 塚崎昌之,2004,「朝鮮人徴兵制度の実態 — 武器を与えられなかった『兵士』たち」『在日朝鮮人史研究』34
- 塚崎昌之,2007,「1945年4月以降の日本への朝鮮人強制連行 — 朝鮮人『兵士』の果たした役割」『戦争責任研究』55,p.12-17.
- 福留範昭,2008,「韓国の『強制動員犠牲者支援法』について」『戦争責任研究』60,p.84-89.
- 福留範昭,2009,「韓国における過去清算の推進と抵抗 — 強制動員問題を中心に」『地域総研紀要(長崎ウエスレヤン大学)』7-1, p.29-34.
- 福留範昭,2010,「韓国における過去清算の推進と抵抗Ⅱ

— 韓国のマスコミ報道を通して』『地域総研紀要(長崎ウエスレヤン大学)』8-1、p.11-18.

水谷孝信 2009、『湖国に模擬原爆が落ちた日 — 滋賀の空襲を追って』サンライズ

【註】

- 1 本調査が実現するように委員会に話を通し、調査を持ちかけてくださったのは、奈良県の川瀬俊治氏である。
- 2 同委員会の公式サイト URL は次のとおり。
<http://www.jiwon.go.kr/>
- 3 両委員会の発足に至る経緯や2009年までの活動等については福留(2008)、福留(2009)、に詳しい。
- 4 後述するように、HK氏は中部軍管区の「自活要員」(自活隊)として配属され、隊の名称も「耕作隊」であったと思われる。塚崎(2004)は、「農耕勤務隊」は「自活隊」とは別であったが、当事の一般の日本人に両者の区別は難しかっただろうという。雨宮(2012)での各証言者(日本人含む)も「農耕隊」と述懐している場合が多く、HK氏も日本語で「ノーコタイ」と言っていたように、一般に「農耕隊」として認識されている傾向があることを踏まえ、本稿では「自活隊」「農耕勤務隊」を包括して、「農耕隊」とする。
- 5 「農耕隊」について、陸軍の資料を精査し、はじめて全体像を描いた研究として、塚崎昌之(2004)および塚崎昌之(2007)がある。長野県に配置された第五農耕隊の「留守名簿」を分析した金廣烈(2010)、全国の「農耕隊」経験者や目撃者の証言等を取材してまとめた本として雨宮剛(2012)がある。
- 6 この世代の話を知ると、このようなケースは非常に多くあり、むしろ生まれてすぐに出生届を出したという話のほうが珍しい。
- 7 1年遅れで戸籍上の満7歳で入学したとすると、1931年の入学になる。この時、朝鮮人(「国語を常用せざる者」)が通う学校は、日本人(「国語を常用する者」)が通っていた尋常小学校とは異なり、普通学校といって4年制であったはずだが、HK氏は6年制の尋常小学校に通ったと述べた。
- 8 雨宮(2012)所収の韓明洙氏の証言でも、「私は日本語ができたので……通訳のほか管理・補給担当の事務職にまわされた。…私は概ね激しい労働からは免除された」「襟章には星が一つだけついていた」と述べている。同様に金性圭氏も「私はね、日本語ができたもんでね、中隊長の連絡係をしていたんですよ」と述べている。
- 9 「少年農兵隊」については、小野寺永幸『秘録少年農兵隊』(本の森、1997年)に詳しい。